

聖書：イザヤ書 11 章 6～10 節

1 私たちが向かうところ

あけましておめでとうございます。年の初めにあたって、今年一年の目標や計画を立てておられる方もいるでしょう。いっぽう、新しい年を迎えて、また一步お墓に近づいたと考える方もいます。年の初めからみもふたもないことを言いましたが、確かに人生の究極のゴールはお墓であると、人々は感じています。

でも私たちは、そうは考えない。主イエスが私たちの罪を贖い、永遠のいのちを与えてくださっていると信じています。いつときは、この罪のからだは滅びますが、新しいからだをいただいてよみがえり、天の御国に迎えられるのだと聖書に書かれてあることを信じています。

その天国はどんなところか。こんな会話があります。「天国では、いつも神を礼拝して賛美していると書いてあるようだけれど、そればかりだったら飽きてしまうのではないか。」

確かに黙示録を読むとそんな場面が出て来ます。もし本当に天国がつまらないところであれば、これは大変なことです。なにしろ死ぬことがもうないわけですから、永遠につまらないという苦しみを味わわなければならぬ。これは地獄です。もちろんそれは冗談ですが、では私たちの人生の究極のゴールであるところ、天の御国とはどんなところなのか。昨日は1節から5節を中心にしながら、私たちはどこに向かっているのかを考えてきました。今日はその続きです。

2 新しい天と地

1) ともに伏す

6節を読みます。「狼は小羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さい子どもがこれを追っていく。」

最近、動物園はよく設計されていて、ガラス越しにライオンを間近で見ることが出来ます。頑丈なガラスがあるので、子どもでも安心してそばに寄ってライオンと記念撮影ができる。でも、ここに書かれていることは、動物園にあるガラス越しのことではありません。普通の野生の動物たちの話です。やがて来る新しい天と地においては、すべての動物が弱肉強食というようなものはなくなり、いっしょに草を食べるようになる。いまの世界では、狼は小羊を襲うと決まっていますから、あまりの違いになんだかめまいがしてきそうです。

2) 草をはむ

それともう一つある。7節です。「雌牛は熊とは共に草をはみ、そこ子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。」獅子とはライオンのことです。ライオンは草を食べることもあるかも知れませんが、基本は肉食です。ところがもう肉を食べることはない。草を食べるようになる。肉は体に悪いので、動物たちも菜食主義者になったのか。

実は創世記1章30節にこう書いてあった。神がこの世界を創造されたときのことです。「また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑

の草を与える。」

動物たちがこの地上に現れたとき、食べる物は緑の草ですと、神はきちんと指定していた。最初から肉を食べていたわけではない。では、それがどうしてライオンは肉食になったのか。アダムとエバが罪を犯したとき、土地がのろわれてしまいました。自然界にも、人間の罪の影響が及び、それ以来被造物は苦しむようになったとローマ書に書かれています。ライオンも好きこのんで肉を食べていたのではない。実は今が異常な状態であって、やがて来る新しい天と地においては、神がこの世界を創造したときの元の状態に戻っていきます。

3) これを追う

ここにもうひとつ、「小さい子どもがこれを追っていく」とあります。「追っていく」というのは、家畜を飼うとか、家畜を牧場に連れて行く、そんな意味です。強面のライオンや熊が子どもの言うなりになっておとなしく従って行きます。私が小さい頃のことですが、家に牛がいて、その牛を納屋から外に連れ出せと言われたことがありました。角に引っかけられてけがをしたという話は聞いていましたから、本当に怖かったのを今でも覚えています。牛より小さい山羊でさえ、なかなか人間の言うことを聞かず大変でした。ですから、ここを読むと驚きます。

3 その日

ここには動物のことが書かれていましたが、もちろん神は、動物のことに興味があるのではない。今は食うか食われるか、今は敵対している動物たちでさえこう変えられる。まして人間はどうなるのか。

例えば、だれもが身に覚えがあるでしょう。

若いときに、「あなたを愛します」と誓って結婚したはずなのに、今はどうなってしまったのか。相手が何を考えているのかわからない。お互いに心を閉ざして、嵐が起きないようにただ穴の中に閉じこもっている。相手が攻撃してきたら、その何倍もお返しするのだ、と息巻いています。年賀状に、「世の中が平和でありますように」と書いておきながら、最も身近なところでは、冷たい戦争が続いている。なんとかしたいと思います。しかし、何ともできないところで、みな悲しんでいます。

そんな私たちに神は語ってくださいます。10節。「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」

私たちに「その日」がやがて来る。主イエス・キリストが再び降りてこられ、悲しんでいる私たちを救い出し、私たちにできなくなっていることをこの方が代わりにやってくださる。その日、人と人とが敵と味方に分かれて争う世界は終わります。その日、神と人とが和解し、人と人とが和解します。お互いに信頼を取り戻し、冷たくなっていた愛が回復する。傷つけ合うことは再び起こることはない。

緑の牧場に出かけて、降り注ぐ日の光と穏やかな風の中、老人から幼子まで、笑いながらピクニックを楽しんでいる。そんな日が必ず来る。私たちは、その日を待ち望みながら歩んでまいります。